

## 老いと、病と、心境変化

渡島医師会  
介護老人保健施設やわらぎ苑上磯

齊藤 仁美

それまでの専門科から全く畑違いの高齢者介護の分野で仕事をするようになって、あと半年で4年になります。認知症・難聴・筋力体力低下や麻痺、あらゆる組織の脆弱性と臓器障害を抱えた高齢利用者さんたちの診療に日々困難を感じながらも、同じ法人や地域の諸先生方のお力を借りて何とかやってこられたと思っております。図々しくもこの場をお借りしまして改めて御礼申し上げます。

この間に自分自身が病を得て定期的に通院するようになり、我が国のありがたい国民皆保険制度、日々進歩する医療、そして全国隅々まで行きわたる充実した医療体制を支える関係者の皆様の不断の努力に改めて感謝すると同時に、大きな病院への通院が体力の衰えた高齢患者さんにとっては一大イベントであることに気づきました。

忙しく早足で歩く職員や多くの患者の行き交う広くて長い廊下。いつ呼ばれるかと気の抜けない待合室。体のあちこちが痛み歩行速度が落ち足元もふらつくわが身にとっては、遙か彼方に思える検査室。いずれも仕方のないことではありますが、一日がかりの受診から帰苑された利用者さんがぐったりと疲れた顔をされているのも納得がいきます。比較的規模の小さい病院やクリニックであってもおそらく同様のなのでしょう。まだ若くて健康で体力もあり、院内を昼も夜も脇目も振らずに駆け回っていた頃には想像もつかないことでした。

「あら、今日〇〇さん見かけないわね、どこか悪いのかしら」という病院待合室での会話が、待合室が元気で時間のある高齢者のサロンと化し、医療費の無駄遣いを招いていることの象徴として、半ば笑い話的に引き合いに出されることがあります。「そもそもどこか悪いから通院しているのではないのか」「具合の悪い時に病院に行かないのでは本末転倒」「病院待合室はもてあます時間をつぶす場所ではない」。健康な頃の私はそう考えてしまっていました。一転して自身が医療を受ける側となり、〇〇さんとおそらく同年代であろうこの会話の主は、〇〇さんが何か大きな病気で入院でもしているのではないか、という身につまされた心配をしていたかもしれない、と思うようになりました。人生経験も社会経験も著しく不足していたとはいえ、医療者としてあるまじき想像力と思いやりの欠如だった、と自分に恥じ入るばかりです。日常的に高齢者に関わるようになった今では、待合室での他愛もない近況

報告や、お互い同じような病気や痛みを抱えた者同士で愚痴や悩みを言い合うことには、独居高齢者の孤独を紛らわせ、抑うつや気力低下を予防する効果もあるのかもしれない、と思っております。

定員80人の入所利用者のほとんどが女性、47%が90歳以上、100歳超の方が2名、支えるスタッフは大多数の中・高年と少数の若年者という、超高齢化社会の縮図のような当施設です。文字通りの寝たきりの方も数名おられ、世の中には社会保障費の無駄遣いと誇る向きもあるでしょう。ですが、戦中の空襲をかいくぐり、戦後は男手も少ない中で現代からは想像もつかない大変な苦勞をして焼け野原からの復興の柱となり、栄養も足りず国民皆保険などあるはずもない貧しかった時代をたくましく生き抜いたこの世代の方々に感謝と敬意をもって、穏やかで満ち足りた生活を送っていただきたい、日々の診療に真摯にあたっていきたいと思う今日この頃です。

ところで、この原稿を書いております現在、世界各国で新型コロナウイルス感染者が増加しつつあり、特に1月末からのここ2週間ほどは日々感染拡大・死亡者数増加の情報が続いています。厚生労働省からは各都道府県に「帰国者・接触者外来」を設置するよう通知が出されました。当苑の所在する北斗市は観光地函館に隣接し、新幹線の新函館北斗駅もあります。利用者さんの中には近親の方が観光業に携わる方もおられ、疑い患者が直接受診する可能性が皆無である最後方の介護施設とはいっても毎日が気ではありません。従来型の多床室、ほぼ全員の入所利用者さんが一堂に会して三度の食事を共にする当施設では、伝え聞くウイルスの感染力の強さをもってすれば瞬く間に感染が広がってしまうでしょう。危惧してはいても現時点では最大限の警戒をしつつ通常通りの予防策をとるしか手がなさそうです。中国では診療や感染防止対策にあたっていた複数の医師が亡くなりました。ウイルスに関する情報もいまだ錯綜している段階ではありますが、最前線で診療にあられる先生方はじめコメディカルの皆様のご無事と、感染した方の快癒と、渡航制限を含めた有効な防疫手段、早期のワクチンおよび迅速検査キット・治療薬開発により事態が終息することを心より願います。